

## 徐福伝説から伝承へ

大隈 孝一

古代中国の戦国七雄の一つ斉出身の「神仙方士徐福」が、今から二二〇〇年以上前、日本列島に渡来したという伝説を知っている人は少ない。徐福、別名徐市は、司馬遷の『史記』に四回も分かれて登場する歴史上の人物で、その親族を名乗る徐氏一族が、現代中国の各地に点在している。これは、秦の始皇帝に長寿の薬を東の海上にある三神山から持ち帰ると約束した徐福一向が帰国しないため、徐氏一族は始皇帝に追われていたからだと伝わっている。然しその徐氏一族と交流を続け、「徐福伝説」を信じる団体が、日本にもいくつもある。

かつて同じ肥前の国だった佐賀地方もその一つで二〇一五年、佐賀県と市が協力して中国と韓国から関係者を招き、徐福シンポジウムを開催している。



徐福像と記念碑

老子・荘子の道家思想を受け継いだ徐福は、戦国七雄の勝者秦の始皇帝の中国統一の戦いで、最後まで残った斉の最先端を行く神仙方士だった。神仙方士とは、東の海上に蓬莱・方丈・瀛州の三神山があり、そこに仙人が住み不老不死の薬を持つという仙話を作り、それを信じた道士のことで、この仙話の起源は中国古代の神話と地理の書「山海経・海内北経」の蓬莱大人仙話に「蓬莱山は海中にあり、大人の住居は海中にある」からきているという。

また、六三〇年余り続いたこの斉の人騶衍(前305〜240年頃)は、理想の州として

だが徐福は、そのまま選ってこなかった。その史実を「史記・淮南衡山列伝」には、次のように記している。「秦皇帝大説、遣振男女三千人、資之五穀種百工而行。徐福、得平原広沢、止王不来。」(秦の皇帝大いに説き、振男女三千人を遣わし、之に五穀の種と百工を資して(与えて)行かす。徐福、平原広沢を得、止まり王となりて来らず。)

つまり、徐福は、征服者始皇帝の意に反し、海外に平原広沢の地を得てそこに止まりその王となつて還らなかつたのである。

この徐福の史実を、始皇帝陵兵馬俑坑の発掘に現地でも協力し「始皇帝を掘る」を上梓された考古学者故樋口隆康(京都大学名誉教授)は信じておられた。私は先生に、現在製作進行中の映画『封泥・卑弥呼への信』のシナリオ執筆中に、京都・奈良で何度もお会いし中国古代史と考古学の薫陶を受けた。先生は、昨年四月、95歳で亡くなられたが、90歳まで糧原考古学研究所の所長を務められていたので、その英姿を活写して卒寿祝いとして贈呈し悦ばれた。師は又シルクロードの考古学者で、あの爆破されたパーミヤーンの巨大仏像を石窟文化遺跡として調査するため京都大学中央アジア学術調査隊の隊長も務められ、その復元にも尽力されていた。実は師の先祖代々のお墓は、原マルチノと同じ長崎県佐波見にある。

生前、先生と最後に京都でお会いしたとき、国内での徐福伝説の拡がりの弱さを心配され「伝承の実態をよく調べて欲しい」と吐露された。それに私が現在製作進行中の映画では邪馬台国が、単に「九州か畿内」だけではなく、徐福東渡の二二〇〇年以前の中国戦国時代まで、文献上、考古学上遡って鋭意調査・取材をしている。

その結果、縄文時代から、わが日本列島の青森・埼玉・高知では漆塗の生活用品が使われ、弥生時代の稲作伝搬では、最古は九州、二番目は四国の高知、三番目は瀬戸内の中国・四国、そして四番目に畿内と、科学的に証明された新しい展開がわかってきた。

約一万五千年前は九州と北海道は大陸とつながっており、約八千年前頃から日本列島に海水が流入し、日本海ができた。そして最後に、この日本列島には、30か所ほど徐福伝説があり、それを裏づける伝承と其の証明があれば、卑弥呼がいた邪馬台国はどこか、自明の理となることを確信する。(日本アカデミー賞協会会員・オフィス90代表)

「大九州地理学説」を唱えた。その学説は「中国の外に海をへだてて九つの州がある。名を中国名で赤県神州という。このまわりには小さな海があり、人民・動物はよく通じ合っており一つの区域のようだ。そこで、これを州という。このような州が海に囲まれて九つある。そして、大海がその外を囲んでいる。更にその外が天地の境である」(古代中国の州は全土を分かつ大きな行政区画で、赤県とは特別行政区のこと)で、漁業・造船・航海の技術。それに齊派医学も進んでいた。齊の人々は、この学説を信じて海の向こうに大きな夢を抱いていたようだ。

ちなみに齊の人々は、春秋時代末期から戦国時代にかけて先住民が敬つていた八神(天主・地主・兵主・陰主・陽主・月主・日主・四時(四季)主)を、引き続き齊の八神として受け継ぎ、その自然崇拜の念を信じていたという。この先住民たちはどこへ行ったのだろうか? 古代から、日本にも自然崇拜の念があり、惟神のちの神道として信じているのは、単なる偶然の一致なのだろうか?

秦が齊を敗つて中国を統一した後、始皇帝は徐福と二度会っている。それも、旧齊の国を治めるために造成した琅邪湾を一望できる琅邪台という新しい役所で。最初、内陸育ちの始皇帝は海洋が舞台の神仙思想に興味を持ち、徐福を招いて三神山の仙話を聞いた。

そこで徐福は不老不死の薬を献上することを提案し、始皇帝は喜んで支援を決め、琅邪湾から出航する徐福を見送った。還つてきた徐福は海神に会つて薬のある宮殿まで案内されたが、見せるだけで、「良家の童男・童女と百工を供物として献上すれば不老不死の薬を渡す」と言われた、と偽の報告を始皇帝に奏上した。

これを真に受けた始皇帝は、積極的に三〇〇〇人の童男童女と百人の技術者に加え五穀(禾・黍・麦・稻・菽・麻)の種などを調べ、琅邪湾や山東半島などから送り出した。

### 風信

○長崎の五月は楠の若葉が薫る憲法記念日・みどりの日・こどもの日と連休に始まる。「五日こどもの日」。恒例により「子どもと共に憲法さるくの会」第十一回を四日開催。今年は螢茶屋一ノ瀬橋に集合、国指定文化財眼鏡橋間の石橋群を訪ねた。参加者多数盛会でした。

○五月五日は男の節句に因んでペーロンがありました。戦前の「男の節句」は旧曆に準じていたので六月初旬にあり、ペーロンは初夏の行事でした。

○ペーロンは一六〇〇年頃より長崎に入港してきた唐船の人達が航海の安全を祈つた行事に始まったと言ひ、後には子供達の陸ペーロン(セイランエ)にまで発展し、街は大いに賑わつたと記してあります。

○長崎の五月節句には「唐あく粽」を食べ菖蒲湯に浸かりました。

○アジア交流友の会中村住代理理事長来訪、五月二十日、本年度総会を同日午後一時半より銭座地区コミュニティセンターで開催するので「唐船の長崎来航」について話をして下さいとの事。(了承いたしました。)

○事務所がある桶屋町より「今年は桶屋町が七年に一度の「長崎くんち年番町」にあたるので御協力下さい」との連絡あり、一同よろこんで参加させて戴きますと申し上げました。

○そう言えば、六月一日は「長崎くんち小屋入り」の日です。この日は朝より一年ぶりに「シャギリの音」が街中に流れてまいります。今年の踊町は五ヶ町で、此の日より踊町の人達は奉納踊の準備を始められるそうです。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一若木太一先生より「長崎先民伝 注解」を戴く。同書は享保年間(一七二〇年)——長崎の儒学者盧草拙父子によつて先賢の遺徳偉業を顕彰するため著述されたもので、之に詳しく注解を加えられたのが本書であり長崎の儒学・天文学・医学等の各分野に活躍した長崎の人々一四七人の事について記されており長崎の諸文化を知ることのできる基礎資料である。若木太一・高橋昌彦・川平敏文各先生注解編纂(勉誠出版・一万円+税)

一野村美術館紀要 2017・26号 野村美術館より、今回は小堀遠州流関係の研究資料で深谷信子・廣田吉崇・E・マレス・他各氏茶道研究家執筆(野村文華財団発行)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

